

おおさか
KEY
わーど
第10回

レクイエムという名の展覧会

大阪の生んだ世界的美術家の壮大な試み



同時開催「[その他]の子カラ。森村泰昌の小宇宙展覧会」の会場 兵庫県立美術館

森村泰昌「セルフポートレート バルードとしての私・2」1996年
『大阪の教科書 大阪検定公式テキスト』掲載。
※今回の展覧会には出品されていない。

相対性理論の天才物理学者アルベルト・アインシュタインが、誕生日にカメラの前でペロッと舌を出した決定的瞬間。それが今回の表紙だが、よく見ると…アインシュタインにしてアインシュタインにあらず、別人が扮している。

実はこれ、世界に知られるアーティスト森村泰昌(1951～)の作品である。森村は、大阪市天王寺区に生まれ、京都市立芸術大学に学んだ。NHK人間講座「超・美術鑑賞術」や朝日新聞関西版の「変身塾」、産経新聞「露地庵先生のアンボン譚」で御存知の方も多だろう。いまも鶴橋の近くにアトリエを構え、自らが名画や写真に扮する「セルフポートレート」の手法で、ゴッホの《自画像》やゴヤ、マネ、北斎などの古今東西の名画になったり、マリリン・モンローや岩下志麻に扮する女優シリーズを発表してきた。大阪検定の教科書で私が担当した「美術」も、通天閣をエッフェル塔に見たてた《セルフポートレート バルードとしての私・2》を掲載している。

近年は歴史上の人物に扮し、20世紀を回顧するシリーズを発表し、1月より兵庫県立美術館で展覧会「森村泰昌 なにものかへのレクイエム—戦場の頂上の芸術」が開催中である(3月13日まで)。表紙もそのなかの1点だ。会場には、ヒトラーやレーニン、毛沢東、チェ・ゲバラなどの政治家から、ピカソ、ダリ、ウォホルや手塚治虫などアーティストに扮した作品が並ぶ。ヒトラーは映画「独裁者」でのチャップリンがもとになり、中之島の中央公会堂の豪華な特別室で撮影さ

れた。大阪万博と同じ1970年、自衛隊市ヶ谷駐屯地で作家の三島由紀夫が割腹した事件を題材に、戦前は第4師団本部であった旧大阪市立博物館テラスでロケを行った映像作品もある。

20世紀と向きあう構想の壮大さに圧倒されるこの展覧会は、昨年3月の東京都写真美術館を起ち上がり、豊田市美術館、広島市現代美術館を巡回し、1年を経て待ちかねての関西開催となった。

ただ残念なのは、大阪が本拠地の世界的アーティストの展覧会が、肝心の大阪で開催されないことである。最大の原因は、市政100周年記念事業として中之島に計画されながらも大阪市立近代美術館がまだ建たないためであり、開館していたら展覧会は中之島で開催されたはずである。昨年10月17日に大阪歴史博物館で開かれたフォーラム「私たちの近代美術館をつくるために」のパネリストとして森村も招かれ、「来るべき美術館／作家の視点から」と題して提言をしている。

近現代美術の名作を多数収蔵して海外にもコレクションが知られながらも、20年以上、美術館が建たないのは実に残念で悔しいではないか。このことをもって大阪の文化度の低さがよく分かると自嘲気味にいう人も多く、計画の停滞が大阪のイメージを悪くし、活力を衰退させている気もする。けっきょく計画が遅れて一番損をしているのは、当の大阪の市民なのだが、それもまた“レクイエム”で語るべきなのだろうか…。

※森村泰昌展の問い合わせは兵庫県立美術館(tel 078-262-0901)